九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

リレートーク : 本音でリレートーク : SOFTにおける電子化

高木, 英行
九州芸術工科大学

久保田, 直行
福井大学

https://hdl.handle.net/2324/4488427

出版情報：Journal of Japan Society for Fuzzy Theory and Intelligent Informatics. 15 (5), pp.656-657, 2000. Japan Society for Fuzzy Theory and Intelligent Informatics
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

知能と情報（日本知能情報ファジィ学会誌）Vol.15, No.5, pp.656-657(2003)

リレートーク

本音でリレートーク
SOFTにおける電子化

久保田 直行*1　高木 英行*2

【高木】

会議や論文誌数の増加に伴い，研究発表だけでなくて，国内外の学会運営に関わる機会が増えてきました．久保田さんも査読やらセッション企画やらで大変そうですね．せっかくの機会ですから，これらの経験を通じてリレートークという流れでまとめてみましょうか．

【久保田】

はい，では査読の話から始めましょう．前号でインパクトファクタのお話がありましたが，査読期間の短縮化も重要な要素になってきていますね．私も，Associate Editor（AE）を務めておりますが，論文査読の自動化は論文誌によってかなり違います．例えば，IEEEのTrans. on RAとITSの査読プロセスは，ともに電子化が終わっています．一方，IEEE Trans. on FSはまだ混在しており，概要と参考文献は事前にe-mailで送られてきますが論文本体は郵送の場合もあります．査読結果は，印刷して郵送とe-mailの添付ファイルで送っている状況です．先生のIEEE Trans. on SMCは既に完全電子化されているのですよね？

【高木】

ええ，SMC学会の3誌とも業者のシステムを使ってほとんど自動化されています．また電子化論文の長所を活かして，音やアニメを含んだマルチメディア論文も積極的に受け付けています．

投稿者がシステムに電子論文を投稿すると，Editor-In-Chief(EIC)の元に自動的にメールが送られます．EICは題目と概要からAEを選んでボタンを押しますと，査読処理の依頼文が自動生成されて送られます．AEが査読者を探す過程は人手で時間がかかるところですが，査読者DBを使うことも可能です．この場合は各査読者の過去の，査読割当論文，承不承諾の返事，査読期間，査読結果，査読報告書の質までも見えます．査読者の質評価もAEの仕事の1つです．査読候補者の専門分野，業績，現職，連絡先などを確認しなければ安心して頼めませんので，インターネットなしではできない世界です．査読者をシステムに登録してボタンを押すと，依頼メールが自動生成され送られます．AEが承諾の返事を受け取り後ボタンを押すと，論文download用ID等を組み込んだ自動生成メールが査読者に送られます．査読報告，最終判定通知なども基本的にボタン一発ですし，締め切り後の査読者への催促は100%システム任せです．投稿，査読者選定，承諾不承諾，査読報告，査読日程管理，最終決定等の内容と履歴がシステムで自動記録されて私が個人的に手元管理することはほとんどありませんし，依頼や断り等のメール生成も自動ですので，出張中でもインターネットさえあればAEの仕事が完遂できます．

費用はかかりますが，査読時間の短縮，通信コストの削減，編集委員・査読者の負荷軽減のために，SOFTの一層の電子化を期待したいところです．

【久保田】

次に国際会議についてですが，今年は3つの会議の運営をお手伝いしました．投稿論文や査読報告は電子化されているのですが，実態は実行委員の一人が管理・運営していました．この管理・運営は大変な労力で，webにアップする前にバグ発見のために実行委員が皆で協力して，様々な誤入力や異なるバージョンのブラウザでチェックしました．Mac使いの私は，何度も先に進めない問題を見つけ，その度にバージョンを限定するなどの解決策を見つけていきました．また，私がセッション企画を担当した会議では，当時，時間がなかったため，エクセルを使って自力で管理していましたが，急遽採択通知を送ることになり，エクセルでパスワードを乱数で発生させ，自分でコピーペーストして送りましたけど，100件以上書くと，頭が真っ白になってきました．やはり，電子化は必須ですね．

【高木】

関西大の村田さんと一緒にSMC2002とSMC2003のセッション企画をした経験をいいますと，昨年は久保田さん同様人手で行ったため大変でした．その経験を

*1 福井大学
*2 九州大学

活かし，今年はフリーの投稿・査読管理システムConf-Manを導入しました．今年は51論文を集め8セッションを企画し，査読管理も我々で行いましたが大変楽でした(楽と言ってもメールやりとりは多くあります)．このシステムがあれば，100人や200人の規模でもほとんど負荷をかけることなくできると思います．

このような支援システムを導入するとSOFTのボランティアの負荷軽減に役に立ちます．ConfManは英語版ですので来年のFIC2004/FSS2004で実際使うかどうかはまだ不確定ですが，九州支部では準備済みです．

【久保田】

国内では，去年の北信越支部シンポを担当しましたが，小規模なのでe-mailでのやりとりで十分対応できました．また，出版費用と手作業製本の労力を考慮して，CD-ROM化しました．CD-ROMに焼いた方がはるかに労力を軽減できますし，綴じるためのファイル代とCD-R代は似たようなものです．当時のAcrobatでは，頁番号等を自動挿入できなかったため1頁ずつ書き込みましたが，最新版では自動挿入できますので50件程度までなら一人の片手間でできると思います．リンク機構を駆使すれば外注並の使いやすい機能を実現できるとは思いますが，講演原稿のファイル名と対応づけた目次ファイル，全ての講演原稿をまとめたファイルを一つ，目次中のファイル名を持つ個々の講演のPDFファイルの構成だけでも十分に使用に耐えます．私は，多くの会議のCD-ROMイメージをHDに保存して持ち運び，学外での原稿執筆や研究のために参照しています．個人で持ち運ぶDBとして考えてもCD-ROM化は，今後ますます重要になってくるでしょう．

【高木】

紙の論文集のぱっと見える長所は代え難いのですが，経費，保管スペース，電子化による再利用，などからCD-ROM化の流れは避けられませんね．SOFTの場合，学会誌とFSS論文集がこの問題では筆頭でしょう．FSS2004では20周年にしてこのCD-ROM化に取り組む予定です．次はSOFT研究会と支部研究会ですね．こちらは数が少ないので電子化の恩恵は少ないように見えますが，それでも研究成果の流通のことを考えるとSOFT全体で電子論文を学会資産として管理運用する視点が必要でしょう．

SOFT研究会と言えば久保田さんのECOmpは発表論文はどのように管理，流通されているのですか？他学会の研究会では定期的に研究会資料を出して定期購読者に販売していますがSOFTではないですよね．定期的に研究会が開催され研究会資料が発行されていないと，引用もできないし参加者も増えませんので，私は結構大きなSOFTの課題だと思っています．

【久保田】

支部・研究部会論文集の残部は学会事務局に送られ販売に回されますが，送るのは一部の常連の支部や研究部会のみで，部数も10数部程度だそうです．FSS開催時には，破格値で販売の案内が出ていますが，購入者数はそれほど多くないみたいです．例えばECOmp研究会は年1回開催していますが，講演原稿や資料を当日持ち込み可にしている関係で製本化しておりません．しかしながら，当日持ち込み可のために製本ができなくても，講演原稿やスライドのファイルを会場で主催者に渡してその場でCD-ROMを作成することもできます．数十部程度で印刷に出しますと，1冊あたり1000円はしますが，CD-ROMにすると100円以下で作れます．「SOFT 100円ショップ」で講演論文集CD-ROMを販売してもいいんじゃないでしょうか．また，1年間の全ての支部シンポと研究会のCD-ROMをセット販売しても1000～2000円程度で済むかもしれません．

【高木】

費用問題だけでなく，研究会資料の定期発行は活性化に重要です．今年から情報処理学会論文誌：数理モデル化と応用(TOM)の編集委員をしているのですが，いろいろSOFTに参考になります．数理モデル化と問題解決研究会も以前は活動が低迷していたそうですが，研究会に連動してTOM誌を持つようになってから非常に活性化したそうです．方法は，研究会発表する著者はその内容の論文誌原稿を研究会1ヶ月前までに投稿する(希望者のみ)．すぐ3週間の2名査読に入り研究会1週間前までに査読結果を集める．残り1週間および研究会当日の編集委員会で最終採否決定をし，研究会会場で著者に査読結果と対応を口頭説明するものです．研究会発表と論文誌投稿の連動，非常に早い採択通知，口頭による編集担当委員の対応など，研究会の活性化，質向上，論文投稿数の増加に寄与するシステムと感心しきりです．SOFT研究会の活性化と学会誌投稿論文数増加のために参考になると思います．

第6期理事会では，国立情報学研究所電子図書館でのSOFT誌論文の公開とそのための過去の投稿論文の著作権委譲問題解決，および電子メディアに対する取り組み開始があり，第7期からは電子メディア担当理事を新設し，SOFT公式HPを設けて，理事会が責任をもって管理を始めました．第8期には，学会誌，査読体制，支部・研究部会活動の電子化など，今後の展開を期待します．